

中国唯識における聞熏習説について

吉 村 誠

一 序言

唯識における悟りは転依によって説明されるが、その機縁となるのが聞熏習である。聞熏習は『摂大乘論』に詳述されている。しかし、漢訳では真諦訳と玄奘訳とで内容が異なり、隋唐時代には種々の解釈がなされていた。小稿では、真諦訳に基づく摂論学派の解釈と、玄奘訳に基づく唯識学派の解釈とを比較して、それぞれの特徴を明らかにするとともに、中国における聞熏習説の展開を跡付けることにしたい。

二 唯識学派の聞熏習説

初めに唯識学派の聞熏習説について検討する。

玄奘訳の『摂大乘論』所知依分には次のように説かれている。悟りを成就するには、仏の教えを他者の言葉・音声として聞き、真理を思索して正見を得ることが必要である。そのためにはアーラヤ識が聞熏習を受け、正見の種子が現行しな

ければならない。出世心はこの清浄法界が等流した聞熏習の種子から生じる。それは汚染なるアーラヤ識を対治するものであるから、アーラヤ識に内在されることはなく、それに寄在して俱転する。聞熏習の種子は、煩惱や悪業を対治し、仏・菩薩に逢事して、法身を得させることから「法身種子」ともいう。聞熏習が増すごとにアーラヤ識は減じてゆき、ついには転依するとい⁽¹⁾う。

しかし、ここにはいくつかの問題がある。どうして汚染なるアーラヤ識に、清浄なる種子が生じ得るのか。聞熏習を受けるならば、誰もが悟りの因を生じ得るのか。

これらの疑問に答えるのが、『成唯識論』の本有・新熏・合生の議論である。そこでは、悟りの因となる種子を「無漏種子」という。

先ず本有義では、一切の種子は本来アーラヤ識にあり、熏習はそれを増長するのみであるという。したがって、無漏種子も本来アーラヤ識にあるもので、熏習によって新たに生じ

るものではない。この無漏種子の種類や有無によって五姓各別があるという。

次に新熏義では、一切の種子は熏習によって生じるといふ。したがって、無漏種子も熏習によって生じるものであり、本来アーラヤ識にあるものではない。これが『撰大乘論』の聞熏習の意味であり、五姓各別は煩惱障・所知障の有無によってあるという。

最後の合生義では、種子には本有種子と始起（新熏）種子との両方があるという。これによれば、聞熏習には有漏と無漏の二つがある。有漏の聞熏習は、修所断であり、出世法の増上縁となる。この聞熏習は有漏種子を新たに生じるのみで、出世法の親因縁とはならない。これに対し、無漏の聞熏習は、非所断であり、出世法の親因縁となる。具体的には、聞熏習により本有無漏種子が増長し、出世心を生じることである。この本有無漏種子の種類や有無によって五姓各別がある。そして、『撰大乘論』で説かれているのは有漏の聞熏習であり、それが出世心の種子を生じるといふのは方便の説であるという。⁽²⁾

ここでは、『撰大乘論』に説かれる聞熏習説は合生義のように解釈すべきである、と主張されている。すなわち、①『撰大乘論』の聞熏習は、有漏の聞熏習であり、無漏種子の増上縁にはなるが親因縁にはならない。②無漏種子は本有ではあ

中国唯識における聞熏習説について（吉村）

るが、声聞・独覺・菩薩によって異なり、有情の中には無漏種子を持たない者もいる。③無漏種子はアーラヤ識の中にあるのではなく、それに依付している、というのである。これは『撰大乘論』の聞熏習説に制限を加える解釈といえるだろう。⁽³⁾

『撰大乘論』が翻訳されたのは貞観二十三年（六四九）、『成唯識論』が翻訳されたのは十年後の顯慶元年（六五九）である。⁽⁴⁾その間、玄奘門下の唯識学派において、聞熏習説をめぐる何らかの問題が生じたのであろうか。その間の事情を窺わせるのが、道倫の『瑜伽論記』の記事である。『瑜伽論記』には、インド瑜伽行派における本有・新熏・合生の議論がしばしば取り上げられている。⁽⁵⁾その内容は『成唯識論』で整理される以前のものと推測される。おそらく玄奘の講義内容を弟子たちが記録したものであろう。

ところが、弟子の中にはこの議論を独自に解釈する者がいたようである。『瑜伽論記』によると、神泰は、本有義に相当するところを本有熏習（旧熏習）といい、これを『瑜伽論』に説かれる真如所縁縁種子とみなしていたという。また、合生義に相当するところでは、新熏習と旧熏習とが和合して聖道が生じるといい、その証拠として『撰大乘論釈』の「聞熏習と解性と和合す。一切の聖道は皆（此）より生ず」という文を引用していたという。⁽⁶⁾この文は、玄奘訳にはないもので

中国唯識における聞熏習説について（吉村）

あり、真諦訳の『撰大乘論釈』にのみ見られるものである。

神泰の解釈は、後述のように、玄奘以前に行われた撰論学派の聞熏習説に基づくものである。それはまた、唯識学派を批判する一切皆成論者の立場を助長するものであった。⁽⁷⁾ このように考えると、玄奘が『成唯識論』で『撰大乘論』の聞熏習説に制限を加えた背景には、撰論学派の聞熏習説を払拭し、一切皆成論を抑制する意図があつたのではないか、ということが推測されてくる。

三 真諦訳『撰大乘論釈』の聞熏習説

それでは、撰論学派の聞熏習説の典拠となつた真諦訳の『撰大乘論釈』の文とは、どのようなものであろうか。『撰大乘論釈』巻三の出世間淨章を見ると、本文は玄奘訳と大差がないものの、注釈の部分には真諦訳にしか見られない文が数多く含まれている。ここでは、撰論学派の聞熏習説に引用される二つの箇所を検証したい。

釈曰……中略……由本識功能漸減、聞熏習等次第漸増、捨凡夫依作聖人依。⁽⁸⁾ 聖人依者、聞熏習与解性和合、以此為依。一切聖道皆依此生。

これは、転依を説明する本文に対する注釈である。ここに先に見た「聞熏習と解性と和合し、此を以て依となす。一切の聖道は皆此より生ず」という文がある。「解性」の意味は

明らかではないが、同論卷一の『大乘阿毘達磨經』の偈に対する釈文に「此阿黎耶識界。以解為性」とあるのに関係があると思われる。⁽⁹⁾ そこでは界の五義が説かれているが、その内容は『仏性論』の如来藏・仏性の五義に基づくものである。このことから、「解性」とは、アラーヤ識にある如来藏・仏性としての性質をいうものではないかと推定される。

また、『撰大乘論釈』には、次のように説かれている。

釈曰、何法名法身。転依名法身。転依相云何。成熟修習十地及波羅蜜、出離転依功德為相。由聞熏習、四法得成。一信樂大乘、是大淨種子。二般若波羅蜜、是大我種子。三虚空器三昧、是大樂種子。四大悲、是大常種子。常樂我淨、是法身四德。此聞熏習及四法、為四德種子。四徳円時、本識都尽。聞熏習及四法、既為四德種子故、能対治本識。聞熏習正是五分法身種子。聞熏習是行法未有、而有五分法身。亦未有而有故、正是五分法身種子。聞熏習但是四徳道種子。⁽¹⁰⁾ 四徳道能成顯四徳。四徳本來是有。不從種子生、從因作名故称種子。

これは、聞熏習は法身種子を生じるといふ本文に対する注釈である。玄奘訳では法身種子に対する注釈はないが、真諦訳にはこのように詳しい注釈がある。これによると、聞熏習は大常・大樂・大我・大淨の四徳の種子を生じるが、四徳は本来アラーヤ識にあり、また五分法身についても同様であるという。常樂我淨の四徳については『仏性論』にも説かれており、そこでは四徳が如来法身の四波羅蜜であるとされている。

(11) ることから、法身の四徳もまた如来蔵思想に基づく説明であることが分かる。

このような注釈が真諦の用いた梵本にあったのか、それとも真諦自身の手で付け加えられたのかは不明である。ここではその問題に立ち入らず、これらの釈文が中国でどのような解釈を生んだのかという問題を考察することにした。

四 摂論学派の聞熏習説

真諦訳の『摂大乘論釈』は六世紀後半に中国北地に伝えられ、隋から唐初にかけて盛んに研究された。浄影寺慧遠の『大乘義章』には、『摂大乘論釈』の聞熏習説がいち早く取り入れている。

聞二無我、熏於本識。本識被熏、成聞熏習。於本識中、有真有妄。真受淨熏、妄受染熏。(12)

慧遠によれば、アーラヤ識には真・妄の二面があり、真が淨熏を受け、妄が染熏を受けるが、この中の淨熏が聞熏習であるという。しかし、アーラヤ識を真妄和合とみる考えや、淨法熏習・染法熏習という觀念は、いずれも『大乘起信論』に由来するものである。

また、『大乘義章』には、次のように説かれている。
於本識中、仏性真心、名為解性。解性受彼淨法熏、成淨種子。(13)

ここでは、アーラヤ識にある仏性真心を解性といい、これ

中国唯識における聞熏習説について(吉村)

が淨法熏習(聞熏習)を受けることで淨法種子を生じるとしている。慧遠は、アーラヤ識の中の真とは仏性であり、それが『摂大乘論釈』の解性であると考えていたのである。このように、真諦訳の『摂大乘論釈』は中国北地に伝えられた当初から、如来蔵思想、特に『大乘起信論』にひきつけて解釈されていたことが分かる。

敦煌本の『摂大乘論』の注釈書には、摂論学派の熏習説が散見されるが、それらは基本的に浄影寺慧遠の解釈と変わるところがない。(14) また、隋の摂論師である道奘は、「立四種黎耶、聞熏解性仏果等義」(15)と伝えられ、アーラヤ識に四種あるとして、聞熏・解性・仏果を論じていたという。さらに、隋末唐初の摂論師である僧弁は、「聞熏与解性和合、転成聖人依、故入発心住也」(16)と述べていたといい、やはり聞熏習と解性の和合を説いていたことが分かる。

円測の『解深密經疏』によれば、唐初には、それらの解釈が真諦自身の説とみなされていたようである。

真諦三蔵、依決定蔵論立九識義。如九識品説。…中略…第八阿梨耶識、自有三種。一解性梨耶、有成仏義。二果報梨耶、縁十八界。…中略…三染汚阿梨耶、縁真如境起四諍。(17)

すなわち、真諦は九識義を立てたが、その中でアーラヤ識には三種あり、その一つに「解性黎耶」があると説いたという。しかし、アーラヤ識に何種あるかについては摂論学派の

中国唯識における聞熏習説について（吉村）

中でも意見が分かれていた。したがって、これは真諦自身の説というよりも、むしろ真諦に仮託された撰論学派のアーラヤ識説ないし聞熏習説と見るべきであろう。

このような撰論学派の聞熏習説は、智顗や吉蔵の著作にも言及されている。智顗の『法華玄義』では、撰論学派の九識説が紹介された後、アーラヤ識の中の生死の種子が増長すると分別識になり、智慧の種子が聞熏習によって増長すると淨識になると説明されている。⁽¹⁸⁾ また、吉蔵の『中観論疏』には、撰論学派の人々は八識に真なる解性と妄なる果報とがあると言い、その証拠に『起信論』や『楞伽經』をあげている、と記されている。⁽¹⁹⁾

ところで、撰論学派では解性や聞熏習の滅・不滅についても議論されていた。聞熏習によってアーラヤ識が減すると、その中の解性が報身仏となるというのが不滅説である。⁽²⁰⁾ 吉蔵自身は、聞熏習はあくまでも有為であり、増上縁であるから、不滅というのは誤りであると考えていた。⁽²¹⁾ しかし、隋末唐初の撰論師である道基は、聞熏習は不滅であると考えており、⁽²²⁾ 撰論学派の間では不滅説の方が優勢だったようである。道基に師事した玄奘も、この問題に直面した一人であった。伝記によれば、玄奘はアーラヤ識が果報である（妄）か果報でない（真）か、あるいは聞熏習は滅するのか滅しないのかなど、当時未決の問題を解明するために西天取經を志したとされて

いる。⁽²³⁾

このように見てみると、帰国後の玄奘は『撰大乘論釈』を新たに翻訳することで、原本には真諦訳にあるような如来蔵的な注釈は存在しないこと、すなわちアーラヤ識はあくまでも妄識であり、解性などはないことを、明らかにしたと言えるだろう。それでも真諦訳による如来蔵的な解釈は、弟子の間でさえ完全には払拭されなかった。そこで、玄奘は『成唯識論』を訳出する際、聞熏習を厳密に規定して、そのような解釈を否定しようとしたのであろう。

五 結語

中国では、真諦訳の『撰大乘論釈』に基づいて、撰論学派の如来蔵的な聞熏習説が形成された。しかし、玄奘が新たに『撰大乘論釈』を翻訳し、さらに『成唯識論』を翻訳すると、唯識学派の聞熏習説が確立し、如来蔵的な聞熏習説は否定されるに至った。

しかし、如来蔵的な聞熏習説は完全に消滅したわけではなく、華嚴教学の中に姿を変えて継承された。法蔵はその著作の中で、アーラヤ識には「本覚解性」があり、真如随縁すると本覚が内熏する、あるいは本覚は無漏法の因縁であり、聞熏習はその増上縁となる、と述べている。⁽²⁴⁾ 法蔵は『成唯識論』の聞熏習説を踏まえたうえで、如来蔵思想による新たな聞熏

習説を提示したと言えるだろう。法蔵の熏習説は澄観に継承され、後世の学者にも長く影響を与えたが、その経緯については別の機会に論じたい。

- 1 『撰大乘論』大正三一、一三六b—一三七a。
- 2 『成唯識論』大正三一、八a—九a。なお、『成唯識論』ではアラヤ識には有漏種子のみがあり、無漏種子はアラヤ識に依付しているという。同十一a。
- 3 ただし、有漏の聞熏習がなければ無漏の聞熏習も起こらない。基は『成唯識論述記』で、「若無有有漏聞熏習、無漏種不生現行」(大正四三、三〇八c)と述べている。
- 4 『開元錄』大正五五、五五六b—c。
- 5 『瑜伽論記』大正四二、四八六c—四八七aなど。
- 6 『瑜伽論記』大正四二、六一四c—六一五a。
- 7 唯識学派と一切皆成論者の論争については、拙稿「唯識学派における種子説の解釈について—真如所縁縁種子から無漏種子へ—」(『印度学仏教学研究』五五—一、二〇〇六年)、「唐初期の唯識学派と仏性論争」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』六七、二〇〇九年)参照。
- 8 『撰大乘論釈』大正三一、一七五a。真諦訳『撰大乘論釈』の聞熏習に関する先行研究には、結城令聞『撰大乘論』に於ける正聞熏習(『仏教学の諸問題』岩波書店、一九三五年所収。後に『結城令聞著作選集第一巻 唯識思想』春秋社、一九九九年所収)、武内紹晃『撰大乘論』に於ける聞熏習論—特に阿頼耶識との関係—(『龍谷大学論集』三三九、一九五〇年)、勝又俊教『仏教における心識説の研究』(山喜房佛書林、一九六一

中国唯識における聞熏習説について(吉村)

- 年)、鍵主良敬「自性清浄心の背景—真諦訳撰大乘論の場合—」(『仏教学セミナー』二八、一九七八年)、岩田諦静『真諦の唯識説の研究』(山喜房佛書林、二〇〇四年)などがある。
- 9 『撰大乘論釈』大正三一、一五六c。この注釈も玄奘訳には見られない。
- 10 『撰大乘論釈』大正三一、一七三c—一七四a。
- 11 『仏性論』大正三一、七九九b—c。
- 12 『大乘義章』大正四四、五二九a。
- 13 『大乘義章』大正四四、五三五a。
- 14 『撰大乘論章』卷一、大正八五、一〇一三c、一〇二二b。『撰大乘論疏』同、九八二b—c。
- 15 『統高僧伝』大正五〇、五一二a。
- 16 『華嚴經探玄記』大正三五、四五六a。
- 17 『解深密經疏』統藏一—三四、三六〇b—c。
- 18 『法華玄義』大正三三、七四四b—c。
- 19 『中觀論疏』大正四二、一〇四c。
- 20 『中觀論疏』大正四二、五四a。
- 21 『中觀論疏』大正四二、一三三b。
- 22 『撰大乘義章』大正八五、一〇三六c。
- 23 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』大正五〇、二七八c。
- 24 『華嚴五教章』大正四五、四八五c、四八七b—c。『入楞伽心玄義』大正三九、四三一c。

〈キーワード〉 聞熏習、解性、『撰大乘論』、『成唯識論』、玄奘
(駒澤大学准教授・博士(文学))